

TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向
化と主観的幸福感・レジャー満足度に関する研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-01-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 秀夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/1215

〔課程博士〕 (博士論文審査及び最終試験の結果要旨)

学生氏名：松本秀夫

博士論文題目：海洋スポーツ・レクリエーションにおける専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度に関する研究

博士論文審査：

本論文では、「レクリエーション専門志向化 (Recreation Specialization : RS) と主観的幸福感 (Subjective Happiness: SH) ・レジャー満足度 (Leisure Satisfaction: LS) の関係」について、量的研究、国際比較研究、質的研究の3つの研究により追究した。

第2章では、米国在住の釣り人365名を対象にRS指標とSH, LSに関するデータを収集した。RS指標は、確認的因子分析によって確認され、クラスター分析によってRSレベルをHigh・Middle・Lowに類型化した。RSレベルと所得を独立変数とする2要因分散分析を行ったところ、SHはRSレベルと所得の主効果が認められた。LSはRSレベルのみに主効果が認められ、多重比較の結果、SH得点は、Low・Middle < High, \$25,000未満 < \$25,000以上であった。LS得点は、Low < Middle < Highであった ($p < .05$)。

第3章では、RSの国際比較のため、日米のスクーバダイバー1,017名のデータを収集した。確認的因子分析によってRS指標が修正され、多母集団同時分析から配置不変・測定不変モデルを確認した。クラスター分析によってRSレベルをHigh・Middle・Lowに類型化した。SH・LSの得点を従属変数、RSレベル、所得、国を独立変数とする3要因分散分析を行った。SHは、RSレベル・所得の主効果が認められたが、国の主効果は認められなかった。多重比較の結果、Low・Middle < Highであった。LSは、RSレベルと国の主効果、RS×国、所得×国の交互作用が認められ、単純主効果の検定から、国において、日本はLow < Middle < High, 米国は、Low < Middle・Highであった ($p < .05$)。国×所得は、\$150,000 (1500万円)以上のみ差はなく、それ以外は日本 < 米国であった ($p < .05$)。

第4章では、経験が豊富な19名のスクーバダイバーを対象として半構造化インタビューを用いてデータを収集した。SHへの影響において、ダイビングの重要性・中心性に関する発話は認められるが、RS形成過程においてSHが高まるといった具体的な発話は少なく、RSとSHの因果関係を明らかにすることが出来なかった。一方、LSは、RSの形成過程において向上し、ダイビングに対するLSは継続され、その質も高まったとする発話がなされた。また、RSの概念によるRSタイプの類型化の有効性を支持するものであった。

本研究はこれまでに欠けていた海洋スポーツ・レクリエーション分野における専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度に関して実証的に分析した点および事例的な因果関係の検証を行った点で優れており、今後のレジャー研究分野の発展にも大きく貢献する優れた研究といえる。以上から、学生から提出された博士論文は、国内外の研究の水準に照らし、本研究分野における学術的意義、新規性、独創性及び応用的価値を有しており、博士の学位に値することを審査委員一同確認した。

最終試験の結果要旨：

最終試験は8月18日に行われた。審査委員一同出席の下、学生に対して、博士論文の内容について最終確認のための質疑応答を行い、その内容は十分であった。一方、専門知識については公開発表会当日の質疑応答や予備審査でのディスカッションを含め十分であると審査委員一同確認した。学術論文は1編が第一著者として採択済み(レクリエーション専門志向化と主観的幸福感・レジャー満足度の関係性: アメリカ在住の釣り人を対象として、海洋人間学雑誌)であることを確認した。英語の学力については、国際学会において英語で口頭発表しており、問題ないと判断した。博士後期課程在学中の研究業績は、著書(共著)1件、報告書を含む論文(申請者筆頭)3件、国内外の学会での口頭発表(申請者筆頭)5件、ポスター発表1件、競争的研究資金の獲得3件(科研費1, その他2)であることを確認した。また、合同セミナーへの出席回数が60時間を超えていることを確認した。以上から、学生について博士論文審査、最終試験とも合格と判定した。